

能動的授業

学生が能動的に取り組み、社会人基礎力を発揮するよな授業の「さまざま」な「ちよつとした仕掛け」を紹介します。

■まず1コマの授業から始めてみましょう

初めから15コマの授業全てのやり方を変えようとするのではなく、まず一番やりやすい内容の1コマで、教員自身や学生に最も合った方法を何か一つ取り入れてみましょう。そのときの学生の反応や、準備・フォロワーの手順を振り返り、自分に合った流れや方法に変えてみればいいのです。

■活動場面に合わせた機の配置で、授業効果がアップ

ペアワーク、グループディスカッション、クラス全員の討議、プレゼン方式の報告など、それぞれの場面に合わせて機の配置を変えることで、学生のより活発な議論や作業を促すことができます。活動別の最適な機の配置図を教室内に掲示しておき、学生にそのつど移動させれば、活動への意識を高めることにもつながります。

授業用ツールには、ミニテスト用のスクラッチカードやビンゴのシートなど、学生が楽しみながら取り組めるものがあるいろいろあります。

■TA (Teaching Assistant)・SA (Student Assistant) を活用しよう

学生がグループワークに慣れるまでは、各グループの会話の内容に耳を傾けつつ、各自の意見を引き出すファシリテーターがについていることが望まれます。教員一人ではなかなかクラス全体をカバーすることは難しいので、大学院生のTA、受講経験のある学生を利用するSAを積極的に活用しましょう。特に、受講経験のある学生をSAとして後輩の指導に当たらせることは、SAの学生にとって自分の学びを振り返る機会ともなり、学生自身の成長にもつながります。また、ミニツッパーパーなど簡単な提出物のチェックはTAと分担して、よりきめ細かく目を通すようにしましょう。

■「チームで働く力」は、

グループワークのメンバーの決め方で決まる

グループワークを通して学生が身に付けるべきは、摩擦を起こさないためのチームワークではなく、軋轢を起こしながらも意見をぶつけ合い、問題解決を通して互いに高め合う姿勢です。そのためには、学生同士が日常でも親密な関係であるよりも、学籍番号やくじ引き

■学生の提出物には、

できる限りコメントをつけて返却しましょう

レポートや試験の答案などの提出物は、教員と学生の重要なコミュニケーションツールです。返却するときには、評価点だけでなく、できるだけコメントやチェックを付けましょう。傍線や○だけでもかまいません。疑問の提起でもけっこうです。特に自己評価の低い学生で、コメント付きの課題返却により、学びへの意識が高まったとする調査結果もあります（「全国大学調査」追跡調査 東京大学大学院教育学研究科、大学経営・政策研究センター 平成21年）。

■授業の予習・リサイメントを義務付けるためには、それなりの仕掛けが必要

授業前の予習は当然のこととはいえ、一方的に義務付けるだけでは、学生もやらされ感を持ち、学習意欲につなげることはできません。予習してきたことを授業内で活かす場面や、ツールを活用しよう。

●予習の内容を使ったミニテストを行う。できれば、チームごとに話し合って解答を考えさせると、それぞれの考えを確認することにもつながります。

●ミニテストをクイズ形式にしたり、結果を星取表にして掲示するなど、意欲付けのための方法やツールを工夫しましょう。欧米など無作為に組まれたメンバーである方が、学習効果が高いようです。また、テーマや課題によっては、途中でチームの組み替えを行い、さまざまなメンバーと組むことによってマンネリ化を防止することにも、互いを認め合う経験につながるとよいでしょう。

グループワークでは、リーダー（まとめ役）、連絡係、記録係などの役割を学生同士で決めさせ、毎回の活動で順番に担当させる。いろいろな役割を経験することで、リーダー・フォロアーの両方の立場を経験させるとともに、特定の学生にリーダーシップや負担が集中しないように配慮します。一人ひとりがチームの一員として活動したり、意見を出し合ったりできるのに最適な人数は5〜6人です。